

学生のコミュニケーションの実態 —— 対象別への対応時の感情 ——

渡 辺 千枝子

Chieko WATANABE

丸 山 順 子

Jyunko MARUYAMA

はじめに

人間の社会関係は、コミュニケーションなしでは存在しない。人は、自分の意思や感情を言語や動作で伝えることにより、相手が理解し、相手がその反応を示すという相互行為的な関係がなりたっている。¹⁾しかし、近年、インターネットや携帯電話の普及に示されるように新たな情報通信技術を活用したコミュニケーション手段の発達に伴い、従来とは違ったコミュニケーションが展開されているように思える。特に、携帯電話は多くの学生が所持しており、かたときも離すことなく会話やメールをやりとりする姿が伺える。

このような新しいコミュニケーションの手段が出現した一方で、核家族化の進行に伴い、高齢者とコミュニケーションを取る機会が減少してきている。²⁾介護学生が初めて施設実習（老人福祉施設、老人保健施設）を経験した時、老人と何を話してよいか、どのように意思や感情や伝えたいことを言語化し、どのように接すればよいか戸惑う学生が多くみられた。

老人に対するイメージに関して村田らは、看護者はどのような老人感をもって老人と接しているか、それによって看護の知識や技術とともに、看護の質や内容を決定するものであるという視点から、看護婦の臨床経験年数と老人へのイメージとコミュニケーションスキルを調査している。その結果老人との同居経験は、老人への好感度に影響しないとしている。また、20項目にわたる質問に対して普通よりポジティブな感覚（肯定的）にイメージしていた内容は①楽しい、②おだやかな ③明るい ④あたたかい ⑤親切的な ⑥安楽な ⑦やわらかい⑧好意的な ⑨話し掛けやすい ⑩話好き ⑪楽天的な、である。反対にネガティブなイメージとしては①遅い ②受動的な ③消極的な ④依存的な ⑤自己中心的な ⑥弱い、をあげている。³⁾

さらに、後藤らは、老人のイメージに関する研究で、看護学生と介護学生のイメージの違いを調査している。それによると、彼らは、①意義のある ②好意的な ③深みのある ④注意深い ⑤あたたかい ⑥正直な ⑦気長な ⑧おだやかな ではポジティブなイメージをもっている。また、一方①孤独な ②保守的な ③遅い ④弱い、などはネガティブなイメージとしてとらえている。

さらに、彼らも今までに高齢者と接した経験による老人のイメージ、および高齢者ケアに

対する感じ方に相関関係はみられないとしている。⁴⁾

人間の社会関係の中で、特に、介護の実践の場においては、利用者とのよりよいコミュニケーションが必要不可欠である。このよりよいコミュニケーションが利用者のニーズを的確に把握し、利用者のニーズを満たし、介護の質の向上につながると考えられる。そのために、学生のうちからコミュニケーションの能力を高めることが我々の課題となってくる。

介護技術におけるコミュニケーションの単元の演習や、施設実習のプロセスレコードの内容を検討してみると、意図的に会話する、目的意識をもって会話するということに対して、大変な努力を要し、悩んでいることが推測される。

以上のことから、学生のコミュニケーションの方法、時間、内容の実態を把握し、学生が対象に対応する時の感情を知ることで、その実態に即した教育を行う基盤にしていきたい。

I. 方法

1. 対象者

当短大の介護福祉学科1年生、101名。

学生は、平成12年7月に5日間、老人福祉施設および老人保健施設にI期実習を行った。実習目的の主なもの、①施設における老人の生活を理解する、②コミュニケーションや環境の整備など履修した介護技術を使って具体的な援助を行うことである。

2. 調査方法および内容

以下の調査項目を作成し、調査用紙を配布しその場で回収した。コミュニケーションの対象として、学生の生活の中で家族という社会の最小単位の中で最も血縁関係が近く年齢差がある親、同年齢層の友人、実習や就職で接する機会が多い老人（ただし血縁関係のある祖父母も含んでいる）、学校での生活時間が長いと言う理由と年齢差があり立場の相違ということで教員を選んだ。

1) 属性

年齢、性別、家族構成、現在の形態（同居、一人暮らし等）

2) 会話の相手（親、友人、老人、教員）による会話の手段と時間と内容について。

①会話、②電話・携帯電話・メールでどのくらいの時間をどのような内容で会話しているのか

3) 選択回答式質問

①会話の各対象に対してどのような感情でコミュニケーションをとっているのか10項目についてSD法を用いた。

②実習で老人に対する感情は楽しいか、つらいかSD法を用いた。

3. 分析方法

属性、会話の相手、手段と時間については単純集計を行った。

選択回答式質問に対しては多重比較検定と t 検定を行った。

II. 結果

調査対象の回収率は、90名（90.9%）、性別では男性16名、女性74名であった。帰省先の対象の家族構成は、学生の兄弟のある核家族が31名（34%）、兄弟のない核家族が10名（11%）、三世帯同居が46名（52%）あった。（図1）

現在の家族構成は、家族と同居している学生が58名（65%）、一人暮らしが28名（31%）、その他が3名（3%）であった。（図2）

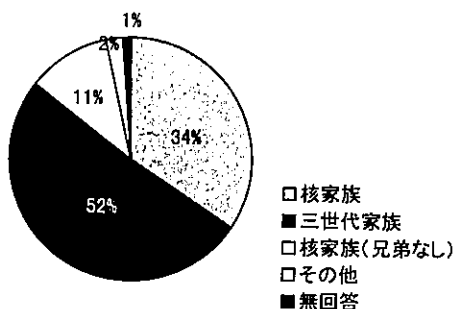


図1 同居している家族

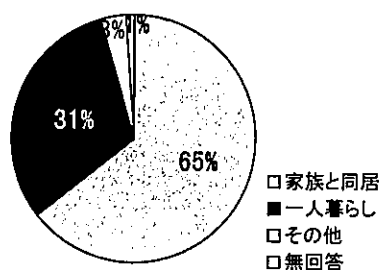


図2 現在の家族構成

1. 一日の会話時間と方法および会話内容

一日の中で、親とは10分以内が10名（11.1%）1時間以内が22名（24.4%）3時間以内が18名（20%）であった。携帯電話・電話等の通信機器を用いて会話する（以下通信と略す）学生は、親に対して10分以内が31名（34%）であった。友人との会話時間は、3時間以上が55名（61.1%）であった。通信の場合は、10分以内は、27名（30%）、1時間以内は19名（21.1%）、3時間以上は10名（11.1%）であった。老人との会話は、10分以内が19名（21.1%）、1時間以内が13名（14.4%）、話す機会のない学生が50名（55.6%）であった。老人への通信は、10分以内が14名（15.6%）でほとんどの学生が用いていない。教員との会話時間は10分以内が30名（33.3%）、残りの学生は、ほとんど会話時間がなかった。加えて、通信の機会もなかった。（図3）

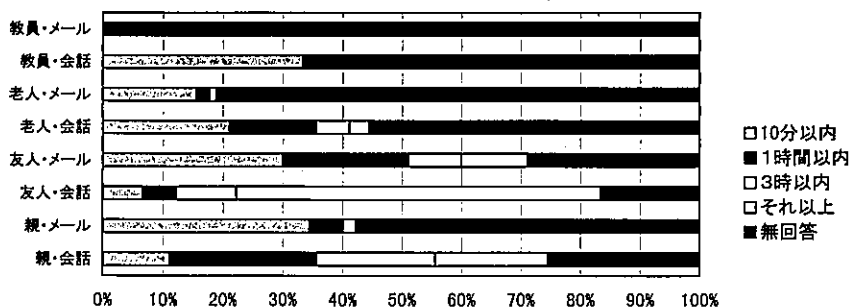


図3 一日の会話時間

会話内容については、親に対して、出来事、学校関係、家族が多い。友人に対しては、趣味、出来事、友人関係等が多い。老人に対しては、出来事、学校関係が多いが、無回答も多い。

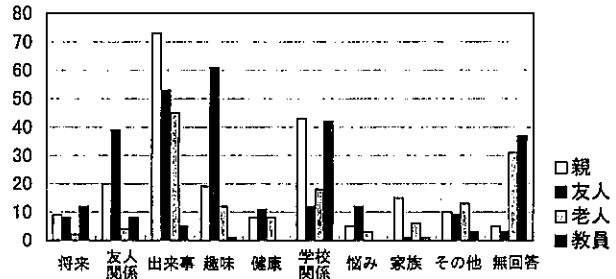


図4 対象別会話内容

教員に対しては、学校関係、将来が多く、無回答も多い。(図4)

2. 対象別の対応

学生が、対象別に対応する時の感情は、次のとおりであった。(図5)

「おだやかな」から「楽しい」までの10項目のうち、「計画的な」を除く項目は、平均点については3以上になった。検定の結果、「おだやかな」「あたたかい」「自己中心的でない」の項目は、対象別に有意差はなかった。「計画的」の項目については、親・友人・老人とも3以下となり、「無計画」の方に偏っている。また、親と友人、親と老人に対して有意差があった。「話し掛けやすさ」「積極的な」「楽しい」の項目については、老人の値が低かった。検定では、老人と友人、老人と親に対して有意差を認めた。

初回の実習で、老人とのコミュニケーションが楽しかったか、辛かったかをSD法で示したところ、平均点は3以上になり、「楽しい」がやや多かった。その結果について、家族構成別に、三世代家族群と核家族群の平均値をt検定したところ、両群に有意差は認められなかった。

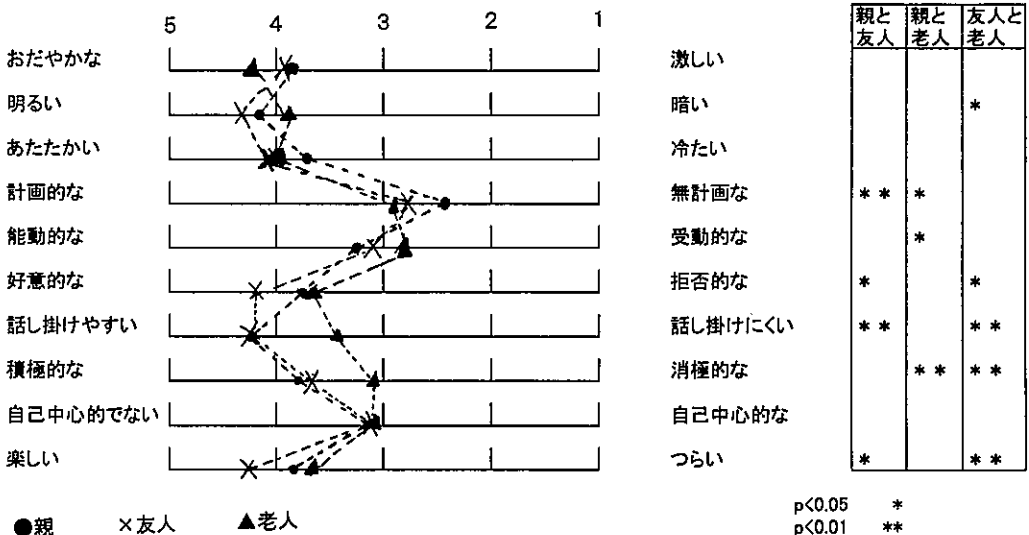


図5 対象別に対応するときの感情

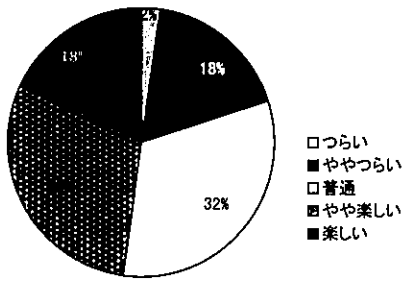


図6 実習での老人とのコミュニケーション

III. 考察

学生の家族構成は、核家族が45%、三世代家族が52%であった。これは、全国の家族構成の割合は、核家族は60.6%、三世代家族は、10.0%⁴⁾と比べると、圧倒的に三世代家族の家族構成が多いことがわかった。

1. 対象別の会話時間、方法及び会話内容

対象別の会話時間については、多い順に友人、親、老人、教員の順となった。日常の中で、多く接する友人とのコミュニケーション時間は、約60%の学生が3時間以上と回答があり、時間的に充実していると考えられる。一方、通信によるコミュニケーションについては、友人という同世代を対象に、頻回に利用されていた。時間的には、一時間以内が約50%を占め、3時間以内も約10%を占めている。今や、携帯電話は、学生の日常にコミュニケーションをとるために必需品となっている。いつでもどこでも私的に相手と通じ合う機器として用いられている。時には、相手の年齢、性別、社会的地位を問うことなくメールを交換していることさえある。このため、より抵抗なくより気軽に電話の向こうの人と知り合い関係を維持していくことが容易になった。このコミュニケーションの感覚は、従来のコミュニケーションにみられた様々な制約や慣習から解放され、コミュニケーションにおいてバリアフリーといわれるような環境をつくったともいわれている。⁵⁾ 一方で、情報社会の中で育った現代の青少年は、自分の思いや言いたいことを言語化することが困難を要す。また、言葉を通じて問題を解決する能力が十分でない人が増えているという。さらに、対話や話し合いを通して、相手の心情を思いやりながら自分の意見を主張して相互交流するコミュニケーション能力に欠ける傾向にあるともいわれている。⁶⁾ 今後、さらに情報化社会が変化し、情報機器を用いる機会が増えるに従って、人と対面してのコミュニケーションではなく、機器を介してのコミュニケーションの機会が増えていくことが予測される。斎藤は、情報化社会で人々の43%が「人間的なふれあい」の現象を心配しているという。⁷⁾ 介護の実践の中では、利用者と対面し、人間的なふれあいの中でコミュニケーションを行うことによって、相手の反応を受け

取るという相互的な関係性が成り立つことが大切である。冬木は、クライアントとのコミュニケーション及び関係性の中で「臨床場面での特筆すべき点は、援助者とクライアントが特殊な関係、つまり、援助関係を構築することである。クライアントと親密であるが、専門的でもある援助関係をいかにして構築していくかが課題である。」と述べている。⁸⁾ 学生の実態に対して、人間的なふれあいの下で専門的な援助関係を築くコミュニケーションについて教育していくことは大きな課題である。

会話内容については、親に対しては、一日の出来事や学校関係、家族のことが多かった。友人については、趣味、出来事、友人関係の内容が多かった。15歳から17歳までの調査によると、困ったことや悩んだことについては友達に相談するが約73%に及んでいる。しかし、一方では、友人関係ではさしさわりのない話をして、深入りしない傾向もあるという。また、自分の主張よりも他の人との和を尊重するものは減少傾向にあるという。⁹⁾ 今回の調査は、悩みを挙げる学生は少なかったが、友人関係の親密度については、この結果からは分析できない。

老人に対しては、出来事や学校関係が多かった。今回の結果では、会話内容についての傾向は確かめられたので、今後は学生が老人とコミュニケーションを取るときの困難性について探求していく必要がある。

教員に対しては、学校関係が多く、それ以上に無回答が多かった。これについてもこの結果だけでは、分析できない。

2. 対象別の対応時の感情

各対象者に対応するときの自分の感情は、平均値からいくと「計画的」の項目を抜かず9項目で3を上回った。この結果、「おだやかな」「明るい」「あたたかい」「能動的な」「好意的な」「話し掛けやすい」「積極的な」「楽しい」という比較的ポジティブな感情で会話していることがわかった。中でも「おだやかな」「あたたかい」「自己中心的でない」項目は、どの対象に対して有意差なくその感情で会話していることになる。「計画的」については、肉親である親が低く、友人、老人に有意差を認めた。親には、何を言っても許容される関係ができていると考えられる。友人や老人に対しては、一歩距離をおいて話す心構えもあると考えられる。

「話し掛けやすさ」「積極的な」「楽しい」の項目については、老人がやや低く、老人と親、老人と友人との間に有意差が生じた。また、老人は、10項目中「楽しい」を除く全ての項目で標準偏差が大きかった。老人はやや苦手な学生も含まれると考えられる。

初回の実習にて、老人とのコミュニケーションは楽しかったか、辛かったかをSD法で示したところ、3以上でありやや楽しいという結果になった。また、家族構成別に、三世代家族群と核家族群とt検定したところ両群の有意差はなかった。老人とともに生活をしている

ということと、老人とコミュニケーションの楽しさとは、関係がないと考えられる。つまり、専門職として接する場合と日常の中で接する場合では、状況や立場が異なるからであると考える。老人とともに生活している体験がコミュニケーションの中でどのように生かされてくるのかは、今後検討が必要である。

IV. まとめ

当短大の学生における日常のコミュニケーションの実態を分析したところ、以下の結果を得た。

1. 一日の会話時間は、多い順に友人、親、老人、教員であった。
2. 学生にとって、携帯電話などの通信機器を用いてのコミュニケーションが日常の中で頻回に行われていた。
3. 会話の内容は、多い順に親の場合、一日の出来事、学校関係、家族のことであった。友人の場合は、趣味、出来事、学校関係であった、老人の場合は、出来事、学校関係であった。教員の場合は、学校関係であった。
4. 検定の結果、「おだやかな」「あたたかい」「自己中心的でない」の項目は、対象別に有意差はなかった。「計画的」の項目については、親・友人・老人とも3以下となり、「無計画」の方に偏っている。また、親と友人、親と老人に対して有意差があった。「話し掛けやすさ」「積極的な」「楽しい」の項目については、老人の値が低かった。検定では、老人と友人、老人と親に対して有意差を認めた。
5. 初回の実習にて、老人とのコミュニケーションは楽しかったか、辛かったかをSD法で示したところ、3以上でありやや楽しいという結果になった。また、家族構成別に、三世代家族群と核家族群とt検定したところ両群の有意差はなかった。老人とともに生活をしているということと老人とコミュニケーションの楽しさとは、関係がなかった。さらに、この調査に協力した学生のうち、三世代同居家族の割合は、52%であり、全国の家族構成の中で三世代家族の割合が10.0%と比較して、圧倒的に割合が多かった。

V. おわりに

今回の調査にて、学生の日常におけるコミュニケーションの実態の一部が確認できた。今後さらに、実態を究明していく必要がある。また、施設実習でのコミュニケーション場面を検討し、専門的な援助関係を築くための教育方法を探究していきたい。

参考文献

- 1) 冬木春子：クライアントのコミュニケーション及び関係性、現代のエスプリ、92-100、2000

- 2) 湯沢雍彦：図説 家族問題の現在、NHKブックス、158-169、1998
- 3) 村田裕子他：看護婦の経験年数別にみた老人のイメージとコミュニケーションスキルの検討、第28回老人看護、145-148、1997
- 4) 後藤真澄：老人のイメージに関する研究、看護教育、129-133、38 (2)
- 5) 厚生統計協会 国民の福祉の動向 40 (12) 2000
- 6) 総務庁青少年対策本部 青少年白書9、10-28
- 7) 斎藤耕二、菊池章夫：社会化の心理学ハンドブック、川島書店347-361、1990
- 8) 総務庁青少年対策本部、青少年白書10、33-81
- 9) 1) 前掲書
- 10) 8) 前掲書 p 55-71
- 11) 8) 前掲書 p 55-71